

普及レポート
連続講座

「ウォーターレス・リトグラフ」



2019年1月13日(日)、20日(日)

ウォーターレス・リトグラフというあまり耳慣れない版画の技法を体験する講座を開催しました。

リトグラフは水と油の反発作用を利用したもので、版面に油性の描画材で描き、水で浸しながら油性インクをローラーで盛ると描画部分にだけインクが付き、紙に刷りまします。一方、ウォーターレスはその名のとおりに水を使わず、水の代わりにシリコンを非描画部で覆うリトグラフです。

受講者に原理を伝えるものの、みなさん臍に落ちない表情で作業はスタート。まずは、下絵をリトグラフ用のアルミ版に転写します。アルミ版への描画は、水溶性の鉛筆とトナーを洗剤と水で溶いたものを用いて、下絵をもとに描き上げます。描画が終わるとシリコンを塗って1日目は終了。2日目は刷り。まず、描画した部分をシリコンとともに、水やアセトンで落とします。受講者は恐る恐る作業を進行。描画部のシリコンが落ちたところで、オフセット印刷用のインクをローラーで版にのせます。すると、描画部だけにインクが付き、受講者は狐につままれたような顔を。最後にプレス機で刷り、描画したとおりに紙に転写されたのを見て、うれしそうな表情がこぼれていました。

従来のリトグラフは工程が複雑で修得に時間を要しますが、ウォーターレス・リトグラフは、工程が簡単で失敗が少ない点で、受講者の心を掴むことができました。ただいまアトリエではウォーターレス・リトグラフの輪が広がりつつあります。(石崎 三佳子)

版



刷り上がり



普及レポート

地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業

えひめ「対話型授業」アウトリーチプロジェクト

「対話型授業」とは、ニューヨーク近代美術館から始まった「対話型鑑賞」を、美術を含む自然科学や歴史等、他の分野に応用した授業のことです。

そして「アウトリーチ」とは、例えば、ふだん美術館内で行われている美術に関する様々な活動を、館を飛び出して、広く多くの人々に届ける、ということの意味します。

愛媛県美術館は、2015年度から2018年度までの4年間、文化庁より助成を受け、県総合科学博物館、県歴史文化博物館、そして東・中・南予の有志の小中学校とともに、表題のプロジェクトを展開しました。目的は、対話型鑑賞を小中学校の教科教育に応用し、新学習指導要領に対応する指導法を開発・普及することです。

1年目は「メンバー間での対話型鑑賞の共通理解」を行い、次いで2年目はメンバー以外の仲間を募って「対話型鑑賞とその進行役を担う“ナビゲーター”の役割についての理解」を、更に3年目はメンバーと研究協力校とともに、「対話型授業の研究・開発」を行いました。そして最終年度となった昨年には、プロジェクトの集大成として、メンバーの協力のもと、書籍「教えない授業」英治出版発行と事例集「先生のための対話型授業のススメ」同事業実行委員会発行(非売品)を刊行し、「対話型授業」の土壌づくりと種まきを終えました。

さて今年度。今、あちこちから芽が出始めています。これらの「芽」を育てていくことが今後の課題となりそうです。(鈴木 有紀)



※「教えない授業」(英治出版発行)はミュージアムショップにて1,600円で販売しています。



INFORMATION

夏休みちよこっとアート マジカルうちわ

夏休み、ご家族で楽しめるワークショップを開催。「魔法の美術館」に合わせ、暗闇に光る絵の具などを使って、うちわに好きな絵を描きましょう！みなさんの参加をお待ちしています。

- ◆日 時：2019年8月3日(土)・10日(土) 各10:30～12:00
- ◆材料費：150円
- ◆所要時間：30分
- ※汚れてもよい服装でお越しください。



ご利用案内

- 開館時間 9:40～18:00(入室は17:30まで)
- ※企画展及び貸展については、入室時間が異なることがあります。
- 休館日 月曜日(祝日、振替休日及び第1月曜日に当たる場合は開館し、その翌日が休館日。年末年始は12/29～1/3が休館日)



新採研修以来でしょうか、採選研修を受けました。あいさつや言葉遣い、電話対応のマネーなど自分の対応の未熟さを痛感しました。心がけのほスピリティ。相手のことを考え行動すること。来館者対応と同様、カンフォロも読者を想像しながら作っていきなさいと思います。(石崎 三佳子)

カンフォロ Canforo

愛媛県美術館ニュースNo.58 2019
発行日=令和元年7月10日 編集・発行=愛媛県美術館

No.58

企画展

魔法の美術館

光と遊ぼう！マジカル・ワンダーランド

2019年6月15日(土)～8月25日(日)

主催：愛媛県美術館



坪倉輝明「七色小道」©cteruaki TSUBOKURA



本多大和(kotonoha)©cyamato HONDA

「魔法の美術館 光と遊ぼう！マジカル・ワンダーランド」この名称から皆さんはどんな内容を想像されるでしょうか。全国各地で話題となっている展示会が、夏の愛媛県美術館にやってきます。

これまで美術作品は絵の具を使って描いたり、木を彫ったりして生み出されてきましたが、コンピュータの出現により、表現方法の可能性は飛躍的に広がり、近年さらに「体験型アート」と呼ばれる作品へと進化してきました。本展示会では、国内外で活躍する注目の9人のアーティストたちの豊かな発想力によって仕掛けられる17種類のイリュージョンが用意されています。

会場は薄暗い空間となり、来館者の動きに合わせて、光や影・映像・音などが多彩に変化し、現実から離れた非日常空間において不思議な体験ができます。「見て、さわって、参加する」ことで、子どもから大人まで世代を超えた全ての方に、「魔法の世界」を体感していただきたいと思っています。

それではいくつかのコンテンツを紹介いたします。

坪倉輝明の「七色小道」 一見ただの道路のように見えても、人がその上を歩くことで人の周りから様々な色や光があふれ出して他の人が出す色と混ざり合い、影響を与え合い、一つのアートになっていく作品です。

本多大和の「kotonoha(ことのほ)」 穴に向かって言葉を吹き込むと、その言葉が形になって、足が生えて、並んで画面を歩き回ります。きっと子供たちは自分の発した言葉の動きをずっと目で追いかけて見ていることでしょう。

小松宏誠の「Lifelog_シャンデリア」 ガチョウの羽根でできたシャンデリアの作品です。展示室の中では、実は人の動きなど様々な要因により、微妙な風が生まれているのです。その風を受け、連なった羽根の輪がそれぞれのスピードで回転し、木漏れ日のような光と影が広がる不思議な空間を表現している作品です。

この展示会は会場内での撮影はすべてOKとなっています。ぜひ撮影も楽しんでください。そして、「魔法の美術館」が夏休みの思い出の一ページになってほしいと願っています。(二宮 茂樹)



小松宏誠(Lifelog_シャンデリア)©kosei KOMATSU

つぶやき



美術館に着任して2か月余り、広々とした堀之内公園に面し松山城を見上げる最高のロケーションの中、日々仕事をさせてもらっています。歴代の館長の中には四季の移ろいゆく城山の風景を写真に撮り続けた人もいます。築20年が過ぎ老朽化が忍び寄り寄ってきてはいるものの、ハードソフトともに好立地に胸じない館であり続けられるよう努めたいと思います。(俊野 忠彦)

企画展
国立トレチャコフ美術館所蔵

ロマンティック ロシア

2019年9月7日[土]～11月4日[月・振休]

主催：ロマンティック・ロシア展愛媛県実行委員会
(愛媛県、愛媛新聞社、南海放送)

Tretyakov
gallery



国立トレチャコフ美術館外観 ©The State Tretyakov Gallery



イワン・ニコラエヴィチ・クラムスコイ《忘れえぬ女》1883年 油彩・キャンヴァス 76.1×102.3cm
©The State Tretyakov Gallery

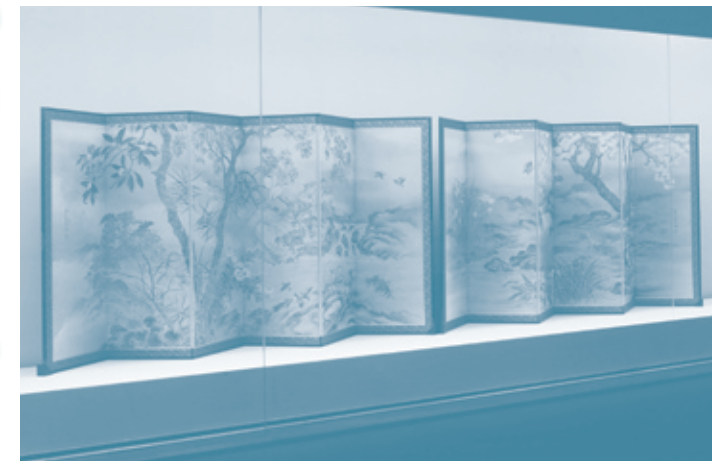
長い厳しい冬、雪解けの春、美しくも短い夏、そして黄金色の秋。広大なロシア固有の自然は画家達のインスピレーションの源であり続けてきました。そうした自然と人間の織り成す情景、風土の趣き、薫り高い文化、人々の感情を鋭敏に感じ取り、絵に表そうとする画家達は後を絶ちません。本展では、ロシア美術の殿堂・国立トレチャコフ美術館のコレクションより、帝政が破綻に向かい革命を迎える激動のロシアで19世紀後半から20世紀初頭に活躍した、クラムスコイやシーシキン、レヴィタン、レーピンなどの作品72点を、「ロマンティックな風景」「ロシアの人々」「子供の世界」「都市と生活」の4章構成で紹介いたします。ロシア的なロマンに思いを馳せながら、近くて遠い彼の国の自然、風土、文化、人物の感動的な美しさに触れられる稀有な展覧会。東京、岡山、山形を経て、この秋いよいよ最後の開催地である愛媛に巡回します。(武田 信孝)

沖冠岳 四季花鳥図屏風 Collection

平成30年度新収蔵品より

昨年度、当館には計98件の作品が新たに収蔵されました。江戸時代前期のものから現在活躍中の作家まで、いずれも本県出身・ゆかり、または関わりを持った作家たちの多様な作品が揃った今回の新収蔵品。これらは、さる4/20(土)～6/2(日)に開催した「平成30年度新収蔵品展」において、お披露目をさせていただきました。

その中でも、ひときわ存在感を放っていたのが、幕末の今治に生まれ、明治初期にかけて京都・江戸で活躍した沖冠岳(1817-76)の《四季花鳥図屏風》。画面いっぱいに、四季折々の花木とそこに群れ集う鳥たちが細やかに描きこまれ、「楽園」さながらの華やかな空間が広がる美しい作品です。一昨年(2017)度に当館で開催した企画展「生誕200年 沖冠岳と江戸絵画展」の会期中に、冠岳の郷里である今治にお住いのご所蔵者から情報が寄せられた作品で、あいにく企画展への出品はかありませんでしたが、展覧会終了後に詳しく調査をさせていただいたところ、冠岳の力量が存分に注ぎ込まれた晩年の大作、なおかつ現存確認される屏風作品としても極めて完成度の高いものと判断され、当館に寄贈していただく運びとなりました。「展覧会が、新たな作品を呼び」ことは珍しくありませんが、今回は、それが作品収集にまで繋がった、大変喜ばしい事例と言えます。(長井 健)



「平成30年度新収蔵品展」での沖冠岳《四季花鳥図屏風》の展示の様子

企画展

高野山金剛峯寺 襖絵完成記念

千住博展

Hiroshi Senju

日本の美を極め、世界の美を拓く
2019年11月16日(土)～2020年1月19日(日)

1958(昭和33)年、千住博(せんじゅひろし)は東京都に生まれました。東京藝術大学大学院にて画法を学んだ後、第46回ヴェネツィアビエンナーレでの名誉賞や第13回MOA岡田茂吉賞大賞を受賞するなど、その活動は国の内外を問わず高く評価されてきました。そのような千住のもとに、2015(平成27)年、ひとつの制作依頼が舞い込みます。依頼主は、平安時代のはじめに空海(弘法大師)によって開かれた真言密教の聖地・高野山金剛峯寺。開創1200年という節目を機に、長らく白襖となっていた茶の間と囲炉裏の裏へ千住博による新しい襖絵を配そうと考えたのです。

本展では、その奉納画完成記念展として、金剛峯寺の襖と床の間を彩る障壁画を奉納に先駆けて公開いたします。「すべてを犠牲にして描いた」と千住が述べる本作は、総延長17メートルの《断崖図》と25メートルの《瀧図》から構成されており、作者自身も画業の集大成として位置付ける大作になりました。また、時間とともに白い瀧から青い瀧に移り変わる《龍神I、II》や1970年代以降の多岐にわたる作品もあわせて紹介し、絵画の新たな可能性を模索し続けてきた千住博の世界を展覧いたします。

横浜や神戸など昨年度から全国を巡回してきた本展も、この愛媛会場が最後の舞台となります。《断崖図》と《瀧図》は本展終了後に高野山へ奉納されてしまいますので、この機会に是非ご高覧ください。(五味 俊晶)

千住博《瀧図(部分)》2018年、高野山金剛峯寺蔵

没後50年 八木彩霞

コレク
ション展

2019年7月6日(土)～8月18日(日)

八木彩霞という画家をご存知でしょうか？

明治19年(1886)松山に生まれた彼は、本名・熊次郎。愛媛師範学校(現・愛媛大学)卒業後、横浜で小学校教員として勤務するかたわら、ドイツ人画家リーデルスタインに師事し、大正後期には、伊予松山藩主の子孫である久松定謨の別邸・萬翠荘の壁画や、宮内省の依頼による明治天皇の肖像画などを制作しました。また、エンゼルのマークで有名な「森永ミルクキャラメル」のパッケージデザインを手がけた人物としても、その名が伝わっています。大正末から昭和初期にかけてはフランスへ留学、グランド・ショミエール芸術学校に学びつつ、藤田嗣治とも親交を結び、ル・サロンへの3度の入選を果たしました。洋画の堅実な写実技法を身につける一方で、同郷の俳人・内藤鳴雪とも交友があったことから、軽妙な俳画も数多く残しています。

今年は、昭和44年(1969)に彩霞が没してから50年の節目にあたることから、特集展示を行います。本領である独特の味わいを持った重厚な油彩画を中心に、洒落な俳画の数々などを一堂にご紹介します。あわせて、藤田や杉浦非水など交友のあった人々の作品も展示します。(長井 健)



八木彩霞《裸婦 グランショミール》昭和元年(1926)



今年の4月より着任しました五味俊晶(ゴミトシアキ)です。専門は日本の近世・近代絵画。本年度は「千住博展」を担当しますが、それ以外の場でも愛媛県(伊予国)の絵画文化を楽しくお伝えできればと思っています。よろしくお願いたします。(五味 俊晶)